水産科学の分野で活躍する女性たち 65

Dynamic Women@Fisheries Science 65

マナティーに一目惚れして研究をはじめ、 独立と自由を求めて団体設立へ

菊池夢美^{1,2}

¹京都大学野生動物研究センター、

²一般社団法人マナティー研究所

MUMI KIKUCHI^{1,2}

¹Wildlife Research Center of Kyoto University, ²Japan Manatee Education and Study Lab (JAMES), Sakyo-ku, Kyoto 606-8203, Japan

略歴

2005年に日本大学生物資源科学部動物資源科学科卒業、2010年に東京大学農学生命科学研究科水圏生物科学専攻博士課程修了(博士(農学))、2014年から京都大学野生動物研究センターに所属。2017年6月18日「情熱大陸」出演。2018年4月一般社団法人マナティー研究所を設立。

研究内容

私は体の大きな水生哺乳類マナティーの行動を研究しています。絶滅の危機に瀕するマナティーはあまり研究が行われていないため、その生態は謎に包まれています。私は彼らの行動を調べるためにバイオロギング手法を使っています。行動の他に水中の音を録音することで、草食性のマナティーが餌植物を食べるときの音から摂餌のタイミングを調べています。2009年からマナティー野生復帰事業に参加し、放流するマナティーに記録装置を着けてきました。そして、アマゾンマナティーの探索行動、摂餌行動、母子のコミュニケーション等について報告してきました。

研究のきっかけ

大学3年生の春休みに初めてマナティーに出会い、その魅力の虜になりました。そして彼ら/彼女らのことを知りたくて研究へと進みました。マナティーが好き、という単純な学生がどうやって研究にたどりついたかという、フットワーク軽く色々な人へ相談しつづけたことで縁がつながりました。学部生のころは他学科の研究室まで相談に行き、運良くはまった水族館の飼育マナティー実験に参加することができました。その後、マナティー研究を発展させようと大学院へ入学したのですが、予定していた海外でのフィールド調査が中止になってしまいました。何もかもうまくいかない中で、当時の指導教員からは「君は研究に向いていない。博士課程では受け入れられない。」と厳しい言葉を受けました。しかし、諦めずに博士課程で別の研究室へ入室した2007年の春、知り合いの女性研究者の方から「ブラジルでマナティーの研究する人を探している」と声をかけていただいたのです。

その後は順調に進み、7月にはブラジルのマナウスにある国立アマゾン研究所へ行き、アマゾン川の固有

種アマゾンマナティーの研究をはじめました。そして博士号を取得したあと、メキシコのアンティリアンマナティー、ペルーのアマゾンマナティー、カメルーンのアフリカマナティー調査を開始しました。マナティー科3種のうち、フロリダマナティー(亜種)以外の全種を対象に研究しています。

団体設立の経緯

「ポストクのうちに思いきり研究をしておいた方がいい。ポストにつくとフィールドで自由に研究できないから」と大学院で先輩たちから聞いていました。最初は疑問を持たずに話を聞いていましたが、博士号を取得して、期間限定の研究員をしていて、ふと疑問に思ったのです。じゃあ何のためにいまがんばっているのだろう。同時に、期間限定の身分に嫌気がさしました。がんばっても将来に繋がらない、そもそも彼らは私たちに先に繋げる気がない。「君は女性だし結婚してるから」「男性を職につけてあげないと」と言われましたし、そういう風潮があると感じています。

南米地域では、研究者が自分で会社や団体を設立して活動することが珍しくありませんでした。そのため、自分の居場所を自分でつくろうと考えるようになりました。これを実現するきっかけとなったのは、2017年6月の「情熱大陸」というテレビ番組への出演です。この経歴は団体設立の追い風になると感じました。そして2018年4月6日に一般社団法人マナティー研究所を設立しました。

女性研究者へのメッセージ

研究というフィールドは非常に閉鎖的です。私も女性研究者が受けるであろう大変な事柄はある程度経験済みです。それでも倒れずに活動できたのは、マナティーを知りたいという強い気持ち、そしてブラジルの女性教授ベラさんから学んだことを心の中の芯に持っているからです。国立アマゾン研究所には女性研究者が多く、ベラさんを筆頭に男女の垣根なくアマゾン奥地での調査をしています。当たり前のようにお互いにサポートしあいます。例えば、体の違いから女性には配慮が必要なときがあり、アマゾン奥地で男女全く同じように過ごすのは困難です。この男女の違いへの対応を「手間」だと考えてしまうと一緒に活動できません。また、トランスジェンダーの研究者もいますし、もはや男女の区別で考えていては各個人の能力を生かしたベストな研究活動ができません。

私の今までの経験上、女性だからできなかったことは、アマゾン川で購入した60Lのガソリンタンクを運ぶことくらいです。さらに、私は3年前から治療法のない難病を患っているのですが、現地の共同研究者の理解を得て、変わらずにマナティーを追いかけています。

研究を目指す若い学生の皆さんや研究者の方達に、こんな人もいるのだな、と面白く思っていただけ、私の経験話で少しでも元気に前向きになっていただければ幸いです。